



教職大学院

Newsletter No.

125

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.7.22

社会創生プロジェクトへの取組

福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 副校長

皆 川 孝 志

1年ぶりで戻ってきた附属義務教育学校、「おかえりなさい！」と笑顔で迎えていただきました。たった1年間ですが、義務教育学校では管理棟（合同職員室・プロジェクトルーム）をはじめ、いくつもの新しい取組が始まっていました。

その中の一つに「社会創生プロジェクト」があります。国語科「話すこと・聞くこと」「書くこと」の2領域と総合的な学習の時間及び生活科を包括した学習です。発達段階に応じ、1・2年生（フェイズ1）、3・4年生（フェイズ2）、5・6年生（フェイズ3）、7～9年生（フェイズ4）として協働探究カリキュラムを組み、ロングスパンでの学びを紡いでいきます。また、「発意－構築－遂行・表現－省察」の5つの過程を1つの探究サイクルとして構成し、繰り返していきます。このような学習を積み重ねることで、社会に意思をもって生き、自主的な学びができる子供を育てるために必要な資質・能力を育んでいきます。

前期課程（フェイズ1・2・3）の「社会創生プロジェクト」の取組を紹介したいと思います。

1年生は「学校をもっとすきになろう」というテーマで「なかよしプロジェクト」に取り組んでいます。2年生との学校探検での「もっと学校の中を見て回りたい！」などの発意から、「調べたことを幼稚園の子やお客さんに伝えたい！」と活動が広まりました。「紹介ポスターを作って伝える」ことになり、只今制作中です。また、2年生や附属幼稚園児との関わりを通して、「もっとつながりたい！」と気持ちが高まっています。これからも人とのつながりをどんどん広めていきたいと考えています。

2年生は「1年生を笑顔いっぱいになろう」というテーマのもと、「学校探検プロジェクト」「生き物ランドプロジェクト」に取り組んでいます。まず、1年生に学校の様々な部屋を紹介しながら探検しました。手作りの地図を使ってツアーのように回ったり、クイズを各部屋に用意したりするなど、思いやりがあふれる活動になりました。次に、育てている生き物について、不思議や発見を1年生に発表しました。伝えたいことを絵や言葉に表したり、実際に生き物を触らせたりする工夫で1年生を笑顔にしてあげることができました。これから、栽培している野菜をおいしく食べるプロジェクトを立ち上げていく予定です。

3年生は、駅周辺を探索してたくさんのお土産物屋をめぐり、お客さんやお店の人にインタビューをしてきました。また、福井城址の見学をしたり、県庁の方から話を聞いたりしました。こうした活動から、子供たちは福井のお土産や、福井の歴

内容

巻頭言	(1)
スタッフ退任の挨拶(その2)	(2)
院生 自己紹介	(4)
インターンシップ/木曜カンファレンス報告	(10)
実践研究福井ラウンドテーブル	
Summer Sessions 2019 報告	(14)
研究集会・公開研究会などの報告	(19)
エジプト研修報告	(20)
各地ラウンドテーブル情報	(22)
スケジュール・編集後記	(24)

史、新しい街づくりについて、詳しく調べたいという発意をもち、「福井の食と歴史」というテーマを設定しました。そして、学年全体で話し合い、まずは「羽二重餅」と「福井の町の歴史」について詳しく調べることになりました。先日、「羽二重餅」について、お店の人から貴重なお話をお聞きしました。これからも、子供たちの発意を大切にしながら学習を進めていきます。

4年生は昨年度の学習（わたしたちの町・福井市）からレベルアップしたいという発意から、「福井県だけのみよく&ひみつを伝えよう ～みんなで情報キャッチ～」というテーマを立てました。まず、福井駅周辺で福井県の魅力を尋ねるインタビュー活動を行いました。次に、若狭地方に出かけ見学や体験活動を行うなどの調査を行いました。そこから分かったことを新聞などにまとめ、ラウンドテーブルで発表しました。発表後、今までで身につけた力について振り返りました。「学ぶ力・まとめて伝える力・協力する力」などが挙げられました。これらの力をレベルアップできるような取組を続けていきます。

5年生は、全員で「自分たちが取り組みたいこと」について話し合いました。「これまでに学んできたことをこれからの学びにつなげたい」「自分たち5年生が今まで以上に繋がりたい」という思いをもち、「頭・心・5感フル活用 つながろう・つ

なげよう」というテーマを設定しました。最初の取組は金沢の街に出かけ、福井との違いについて調査活動を行いました。班別に行動する中で、いろいろな見学や体験をしました。その中で感じたことをラウンドテーブルで発表しました。福井とは違うように感じた「人々の街への思い」「景観や施設」について、これから学びを繋いで行く予定です。

6年生は、5年生の時に長い時間をかけて話し合い決めたテーマが「発見・発信・発展」です。昨年度は「F(Fukui)F(Fuzoku)発信プロジェクト」「地元お宝発掘プロジェクト」を行い、福井県や自分が住む地区の魅力について調査し、発信しました。そして、6年生では、福井の「まちづくり」に尽力している方々をゲストティーチャーに招き、どのように福井に貢献することができるかを話し合い、模索してきました。そして、「イベントを行うまちづくり」「エコ活動を啓蒙・実践することからまちづくりに繋げる」「5年生時の地元お宝発掘プロジェクトを深め、イベントに繋げるまちづくり」を立ち上げました。これから子供たちが考案した「まちフェス」が実現するよう学習を進めていきます。

これからも「社会創生プロジェクト」は子供たちによる探究サイクルで、日々、進化・成長していくことと思います。温かく見守っていただけたら幸いです。

スタッフ退任のご挨拶(その2)

最後の教職生活の2年間、本教職大学院での経験を活かした学校作りを

元福井大学連合教職大学院 准教授 小杉 真一郎

小学校の教頭から一転、本学の教職大学院に籍を置かせていただいて、いつの間にか3年間が経ってしまいました。

元々、重度重複障害のある子どもたちの養護学校（今は特別支援学校と称しますが）を皮切りに、一人ひとりの障害や個性に寄り添った教育を行うことの大切さを十分感じながら教員生活をスタートした

私でした。そのあと、福井県特殊教育センター（現特別支援教育センター）にかわり、小中学校に在籍する今という発達障害のある子どもたちへの巡回指導に携わりました。その中で、そうした子どもたちやある程度重度の障害がある子たちに、通常の学校の中で授業や教育が受けられる学校作り、授業作りができないかと考えるようになり、その後は小学

校に異動し、特別支援学級の教員となりました。そこで、通常学級の先生方や子どもたちはもちろん、地域の人たちも巻き込みながら、生活単元学習などの教育内容の創造や、障害のある子どもたちも生き生きと学ぶことのできる学校づくりに力を入れてきました。

また、その後、市や県の指導主事の仕事に就きましたが、インクルーシブ教育の国際的な流れにも乗って、障害のある子どもたちがそれぞれの教育の場で適切な教育を受けることを前提に、通常の学校や学級でも、どうしても発達障害などのある子どもたちを含め、すべての子どもたちが生き生きできる学習活動がすべての領域・教科で展開できないかと頭を悩ませてきました。個別の支援シートやふくいっ子ファイルや校内支援体制など形を整えてみましたし、授業のユニバーサルデザイン化や学校スタンダードなどの周りの条件を整えることにも、私自身、現場への啓蒙に力を入れましたが、なかなか現場では広がっていかない、しっくりといかない状況がありました。

幸い、教頭として勤務した2年間、一つの学級を1か月担当したり、落ち着かない学級の授業をいくつか担当したりしたことが転機になりました。一人ひとりの子どもの家庭や育ちを含めた状況をしっかり把握した上で、信頼関係を授業内外で築くこと、何の教科を教えるにしても、何の活動を用意するにしても、子どもたち一人ひとりの授業中の様子をしっかりと見て受け取りながら、それに応じて臨機応変に授業を合わせていくこと（もちろん、その授業や活動のめあての達成は外れないようにしながら）この2つがとても大切であると感じました。しかし、当時の私には、日々多忙な先生方にこのことをしっかり伝え、研究を改革できるほどの確信をもってはいませんでしたし、何より、私自身がめまぐるしく変わる学校の不安定な運営に、その余裕すらなかったという状況もありました。

そうした、矢先、本教職大学院のスタッフとなり、特別支援教育の視点というより、通常教育の視

点での授業作りを、院生の皆さんや現場の先生のみなさんと一緒に、考える場面を何度も重ねることができたことが、とても貴重な体験になったと思っています。どの子も生き生きと楽しく学べる通常学級での授業作りや教育活動について、これまで自分が考えていたことが決して間違っていたのではなく、本教職大学院の理論と実践の往還の学びのコミュニティの歴史の中で醸成されてきたことが、私のこれまで考えていた二つのことをこれからの現場で実践する上での大きな後押しとなることになりました。

一つは、これは教職大学院に来る前、福井市の教頭会の研修会で木村優先生をお呼びして学んだアクティブ・ラーニングです。さらに大学に籍を置いてから、様々な学校の先生方や院生のみなさんと授業研究をしたり、語り合ったりする中で、一人ひとり子どもの状況を把握した上で、子どもたちが主体的に対話的で深い学びができるよう授業案＝どんな授業を組み立てるのかを考えること、そして実際の授業場面では、その授業案の筋立てで大切なことを見失わないながらも、子どもたちの思いや考え、授業の流れにそって、臨機応変に合わせていくことの大切さを、改めて自分自身にフィードバックすることができました。

もう一つは、対話や協働を大事にする学び合いを大切にすること。それが、すべての子どもたちの学習場面への参加機会を生み出し、障害や個性の違いを受け入れながら、その人のよい面を認め合えるクラス作りができることです。

今は、教員生活最後の2年間は足羽小学校で過ごすことになり、ここで自分が思い描いてきた学校づくりを、私の一方な押しつけでなく、先生方のやる気や思いを引き出しながら、どう一緒に歩んでいけるのが、私の最後のミッションとなります。また、ラウンドやそのほかのイベントで、教職大学院のスタッフのみなさんや院生の方たちとも協働しながら、やっていきたいと思っておりますので、これからも、よろしくお願いしたいと思っております。

（現福井市足羽小学校 校長）

院生 自己紹介



山田 充 やまだ みつる

今年度より、教職大学院の学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました。普段は「忙しい」という言い訳・隠れ蓑を大義名分とし、自分の実践を振り返ったり、様々な文献を読んだり、他の学校での実践から学んだりする時間をあまり割けずにいる中、じつくりと研究、研鑽に打ち込むことができる教職大学院での2年間は私にとって大切な時間となります。様々な方々に出会い、学ばせていただくことを楽しみにしております。長い講師時代を経て英語科教員として採用されてから、福井県坂井市立春江中学校、丸岡中学校で勤務し、現在は丸岡南中学校で働いています。丸岡南中では、昨年度より研究主任として本校の特色の1つである教員自主研究の進め方について考えています。本校は平成18年、隣の丸岡中学校から分離新設された学校で、生徒が授業ごとに教室を移動する教科センター方式と、異学年縦割り集団（本校ではスクエア制と呼ぶ）による活動が大きな特徴の学校です。一般的な学校とは異なる学校なので、教員の自主研究の進め方についても、他の学校の真似をそのまますることができません。また、働き方改革が叫ばれる今、学校業務は少しずつ変わりつつあります。行事の精選や部活動定休日の設定などが行われる中で、教員の自主研究の在り方はどうあるべきか

についても考える必要があります。もちろん、求められる学力が変わっている中で、全ての教員が研修・研究・研鑽を行う場や時間の確保は大切になります。研究主任として考えるべき点、行うべきことは多く、自分の力不足を感じる毎日を過ごしています。自校での自主研究の効果的な進め方のヒントについても、この教職大学院で見つけることができれば、と考えています。

これまでの研究主任としての活動や、合同カンファレンスなどを通して、最近、自分について気づいたことがあります。それは「それっぽいことを偉そうに言うことは得意だ」ということです。これは自分の長所というより短所です。深く自分自身と話し合いを行うことなく、上辺だけの意見をつい言うことがあり、中身が薄っぺらなため、話し合っても出てくるのは自分の深まった意見ではなく汗だけとなります。一つ一つの活動で、自分自身との対話を意識しながら、他の先生方との協働を通して研究を進めていくこと、これを私の教職大学院での学びの第一歩とします。小さく簡単で、当たり前の一歩ではありますが、自分を大きく、深く成長させるための一歩として大切にしていきたいです。

これから自分の研究を始めます。ぼんやりとしか頂上（ゴール）が見えていない山登りのような研究ではありますが、まずは山登りを自分自身で楽しみながら、これから出会う多くの方々、文献、経験と一緒に、一步一步進めていきたいと思います。よろしくお願いします。



三宅 育代 みやけ いくよ

今年度より、学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました三宅育代と申します。敦賀市立敦賀南小学校の4年生担任をしています。静岡県生まれ、愛知県育ちです。大学卒業まで愛知県で暮らし、

その後バーレーン日本人学校で2年間現地採用教員として勤務しました。帰国後、ご縁があり福井県に嫁ぎ、主婦業、母親業をしていましたが、教員採用試験を受験し福井県の教員となりました。4人の我が子を育てながら、PTAや子供会役員、スポーツ少年団や地域の世話人などをし、親として、また地域の一員として学校活動に外部から参加し、学校を客観的に見る機会にも恵まれました。このような経験は私にとって大きな財産となっています。学校外のお付き合いも楽しみながら、教員としては保護者や地域の思いに応えようと努めて参りました。

現在の職場は、校長を中心に教職員のチームワークのよい素晴らしい学校です。若手が多く、やる気と活気に満ち溢れています。個性豊かな児童が多く、教職員の共通理解により、全教職員の協力体制のもとで、全児童を見ている状況です。また、授業力向上に向けての研究も熱心で、全ての教員が同じ方向を目指して研究を進めています。どの職員も日々熱心

に仕事に取り組んでいますが、教職員数が年々減少する中で、個人の負担が増え、勤務時間が大幅に超過しているのが課題です。

これまでの教員生活の中で、外国の先生方と接する機会や、外国籍の児童を担当する機会が何度もありました。「子どもが遅くまで学校にいるが授業の準備はいつするのか?」「日本の学校の先生は、なぜそんなに遅い時間まで学校にいるのか?」と度々聞かれましたが、日本の教員は、子ども達を帰宅させ、勤務時間を終えた頃やっと授業準備ができるというのが現状です。教員は本当に一生懸命頑張っています。

教職大学院では、「働き方改革と指導力向上について、諸外国に学び現場で活かす手段の考察」のテーマのもと、これまでの教員生活での疑問や葛藤を解決していきたいと考えています。外国の方に自国と日本の教育や教員の働き方の違いについて話を聞く中で、日本の教育の素晴らしさを感じる反面、疑問も感じてきました。教員の勤務時間も短く、公私ともに生活を充実させつつ、教育的効果を上げている国もあるようです。現在の日本の教員の働き方では、教職員の心身の健康面や、教員を志望する若者の減少による教員の資質の低下が心配です。

そこで諸外国の学校の教員の働き方も参考に、児童生徒への指導力向上と、教員が公私ともに自己実現できるような働き方についての研究を深め、実践につなげていきたいと考えています。これから、2年間ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



前田 朋子 まえだ ともこ

福井市明倫中学校で研究主任をしています。研究主任は、今年度で2年目になります。私に教職大学院で学ぶ機会を与えてくださった周りの人達に、感謝しています。

教職大学院に行くきっかけは、先輩の先生の勧めでした。大学院というと、理論的なことを学ぶと予想していましたが、説明会などに参加し、福井大学教職大学院は、仲間と話し合い、じっくり自分の取り組みを振り返る場であることを知りました。自分の視野を広げたり、自分を客観

的に振り返ったりして、今後に活かしたいと考え、受験を決めました。受験にあたり、管理職の先生、当時の学年主任の先生も、快く、賛成してくださいました。また、4月からの校務分掌や学年分掌においても、いろんな配慮をしていただきました。

本校は、平成27年度に「主体的・対話的で深い学び」研究指定を受け、指定の3年目(平成29年度)に、研究実践発表会を行いました。昨年度(平成30年度)は、指定ではなくなりましたが、自主研究発表会を行いました。県内だけでなく、県外から多くの参加がありました。公開授業の授業者の先生は、大きなプレッシャーを感じていました。研究発表会后、ある授業者の先生の「教科の代表として、研究授業をさせ

てもらったことに、今は感謝している。」という言葉が、今も印象に残っています。今年も授業者の先生、そして授業者以外の先生にとっても、学ぶことがたくさんあったという研究発表会になるよう、全員の先生方と一緒に取り組んでいきたいと思っています。

また、研究発表会の成功だけが目標ではなく、研究発表を通して、学校全体で授業改善に取り組み、授業力向上となる校内研究を進めていきたいと考えています。教職大学院での4月・5月のカンファレンスやラウンドテーブルの他の先生の報告や発表を聞く

なかで、昨年の自分の研究主任としての取り組みを振り返ることができました。昨年の自分は、自分が取り組み等を先生方に提案し、それを先生方に実践してもらおうというスタンスだったように思えます。全員の先生方に十分に共通理解を得られていたかと考えてみると、不十分だったと反省します。今年は昨年の反省を活かし、全員の先生方と協働的な、そして組織的な取組になるよう、教職大学院で仲間と語り合うことを通して考え、実践していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



向山 博昭

今年度より、学校改革マネジメントコースで2年間学ばせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

今年4月から福井県敦賀市の松原小学校に勤務しています。学校の隣には、日本三大松原の一つである「気比の松原」があります。白砂青松（はくさせいしょう）という言葉にぴったりな、白い砂浜、美しい松林、青い海は敦賀の自慢であり、夏にはたくさんの海水浴客が訪れます。ほかにも、敦賀には、日本三大木造鳥居の大鳥居を持ち、松尾芭蕉も訪れた「気比神宮」や、「北陸のハワイ」と呼ばれる「水島（みずしま）」があります。おいしい食べ物もたくさんありますので、ぜひ一度お越しください。

松原小学校は、今から28年前に私が新採用教員として赴任し、敦賀での教員生活をスタートさせた思い出の学校です。懐かしい思いで赴任した学校は、20数年の月日を経て、様変わりしていました。当時は各学年4クラスで全校児童700名以上の大規模校でしたが、現在は各学年2～3クラス、全校児童405名の中規模校となりました。空き教室は多目的教室となり、特別教室の配置も変わりました。当時1クラスだった特別支援学級は、現在は3クラスに増えました。当時は20代の若い教員が半数近くおり、保護者の間には若い教員を温かく見守る雰囲気を感じられたのですが、現在は学校や教員に対しての要望や不安感が増えたように感じます。また、児童は、

むこうやま ひろあき

コミュニケーションの稚拙さが原因で起こるトラブルが多くなったように感じています。

私は現在、教務主任という立場で、年間・月間・週間の行事や授業時数等の管理、日々の日課等の管理を行っています。今年度は、敦賀市の全小・中学校が文部科学省の「魅力ある学校づくり調査研究事業」の指定を受けました。児童にとって魅力ある学校とはどのような学校か、児童が楽しく充実した学校生活を送るためにはどのような学校組織を築いていくことが必要かについて、教職大学院での学びを最大限に生かしながら、この調査研究に取り組みたいと考えています。

また、主体的・対話的で深い学び、道徳や英語の教科化、インクルーシブ教育、授業のユニバーサルデザイン化など、新しい変化やニーズへの対応に向けて、勤務校においても日々研修や実践を積み重ねていますが、明確な理論に裏打ちされた実践とは言えず、その方向性に間違いがないかといった不安を抱えながら試行錯誤しているところです。

そのために、私は、教職大学院での学びを通して、これからの子どもたちに本当に必要な資質や能力は何かを見極め、その育成のために具体的にどのような取組が必要かつ有効なのかを考え、学校現場で具現化していきたいと考えています。

入学してからまだ3カ月余りですが、4月、5月の月間カンファレンス、6月のラウンドテーブルを経験させていただき、たくさんのことを学ばせていただきました。特にラウンドテーブルでは、校種や立場を超えた県内外の先生方の実践をじっくりと聴き、意見を交換する中で教育に対する「熱い思い」や「不

安」、「悩み」を共有することができました。そして、全国に多くの同志がいることを肌で感じ、たくさんのエネルギーをいただきました。

これからの2年間、勤務校の抱えている問題をどのように改善していくのか、私自身もどのように成長・変化させていくのかを模索している現在ですが、

お世話になるスタッフの皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。最後になりましたが、私を教職大学院へ送り出してくださった、県教委、市教委、管理職の皆様、職場の同僚や家族の理解と協力に心から感謝いたします。



伊達 薫里 だて かおり

「学び直しがしたい」と考えるようになったのはいつからだったでしょう。大学という場で、自分が学びたいことを学ぶ、そんな時間が欲しいとずっと思っていました。そ

んな願いがやっと実現しました。今年拠点校である福井市中藤小学校に異動になり、心も新たにスタートしました。しかし、学校文化や教員文化の違いに、日々戸惑う毎日を送っています。

目を輝かせて、自分の考えを友達に伝えようとする子どもたちの姿が好きです。友だちの考えを聞いて、考えを深め、集団としての合意を形成し、その後「自分はこう思う」と意思決定した子どもたちの満足げな表情が大好きです。先日も道徳で、考え議論し、休み時間になっても「でもわたしの考えはこう」と板書の前で対話する姿がとても嬉しかったです。子どもたちには、「僕はこう思う」「私はこんな風に生きていきたい」と、夢と希望をもち、自分に自信をもって生きていって欲しいと願います。

生きていくのに必要な力は、目の前の問題を解決するための、「問題解決能力」「知識活用能力」です。学力も、知識や技能だけではなく、問題解決能力、知識活用能力などの見えにくいものも含まれます。それらを身に付けさせるために、問題解決的な授業を行ってきました。子どもにとって大切なことは、自分で考え、自分で表現でき、そこで得た喜びによって学ぶことの真の楽しさを味わうことではないかと考えます。それができたときに、達成感が広がり、自己肯定観をもつことができます。そのために、まず「学びたい」という意欲を起こさせることを大切にしています。

また、よりよく生きるために人と「関わり合う力」を育てています。授業では、学び合いを通して、多様なものの見方や考え方、感じ方があることを知ります。そのために多様な意見と出会う場としての対話を仕組みます。自分がその考えをもつに至った理由、根拠を聴き合うことで考えが深まっていきます。自分の学びと友達の学びが関わり合うことにより、学びの質を高めていくことができます。正解主義から脱却し、「納得できる答えをみんなでつくりあげていく学び」、「問題解決の喜びをみんなで味わえる学び」をつくりたいと考えています。

昨年は、道徳の「発問と問い返し」、「学びの履歴としての板書」研究を行いました。その研究を今後も継続したいと思います。日々の授業づくりや授業実践の過程で大切にしていることを「授業スタンダード」として明文化し、若い先生方に「授業の技」として伝えていきたいと思います。そうすることで、日々の授業が変わり、学校が変わることを今後も目指していきたいです。

個は集団の力を借りて学びを深め、生きる力を蓄えていく。子どもと教師の学びは同型である。教職大学院では、この考えのもと、多くの書物や多くの方々のご意見に触れながら、自分の考えをまとめていきたいと思います。教員生活も残り3年。後ろを振り返る余裕もなく、ひたすら前を向いて歩いてきたなと思います。ここでいったん立ち止まり、34年間を省察し、自分史を書いてみたいと思います。自分史とは、いくつもの実践記録をつなぎ、長期の実践記録を作成することです。それは、自分の教育活動への価値観や信念を問い直していく作業になると思います。「今、自分にできることは、何だろう」と考えるようになりました。教職大学院での学びが、子どもたちのため、そしてこれからの教育を担う若い先生方の一助になればと思います。よろしくお願いいたします。



嵩谷 浩太郎

この度、4月より福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースでお世話になります嵩谷浩太郎（だけやこうたろう）と申します。

珍しい名字で読みづらいかとは思いますが、よろしくお願い致します。

私は、社会福祉法人和田保育園の運営する幼保連携型認定こども園「和田こども園」の園長をさせて頂いております。当園は、昭和45年4月に和田保育園として開園、来年には設立50周年を迎えます。そして、平成28年4月から幼保連携型認定こども園の認可を受け、7月1日現在239名の園児と62名の職員で日々の園生活を楽しんでおります。

私自身は大学を卒業後18年間の銀行員生活を送った後、平成20年4月より事務長として当園の運営に携わり、平成26年4月に園長に就任いたしました。園長就任当初の私は、園の経理や労務管理、そして補助金の申請などの行政とのやり取りが自分の仕事だと思っていました。なので、研修等で聴いてきたことを伝達する程度で教育・保育については口出しせず、専門職である保育教諭に任せっきりでした。しかし、世の中が大きく変わり予測不可能な新時代が到来する中、教育もただ知識を詰め込み試験の場で正確に再生することができる認知的スキルより、自主的に学ぶ姿勢をはじめ、好奇心や粘り強さ、集中力、コミュニケーション力など人間力となる非認知的スキルをどう育むかに変化しています。そして、非認知的スキルは子どもたちの生活の中で身につくこと、そして遊びがとても重要であることを知った時、果たして、当園での生活の中で子どもたちにどれほどの非認知的スキルが培われているのだろうか、興味あるものと出会いその興味を持続させる工夫はされているのだろうか、友だちと語り自分の考えを説

だけや こうたろう

明したり議論したりする場、思いや考えを共有する機会は設けられているのだろうか、と疑問を抱き始めました。

そんな中、福井県幼児教育支援センターの園内リーダー養成研修に当園職員が参加させて頂くことになりました。当園の主幹保育教諭が参加させて頂いた後、副主幹保育教諭の二人も順番に参加させて頂くことで、管理職の学びの共有化が図られ、他の保育教諭にも少しずつ影響を与え始めています。

また、その良いタイミングで、さくら認定こども園、福井佼成幼稚園の公開保育研究会にお誘い頂き、ご一緒させて頂くことになりました。そのおかげで見様見真似ながらも、アクティブラーニングの足掛かりとしての活動を取り入れ始めることができました。子どもたちが主体的に遊び込める環境整備を行うために、私自身が長年の固定観念を改め、率先して当園の教育と保育を変えていくことが必要だと考え始めると共に、私自身も現場に携わりたい、そしてこれからの教育がどう変わっていくのかを学んでみたいという意欲が湧いてきたのをきっかけに連合教職大学院の受験に至った次第です。新時代を担う子どもたちの生きる力を育むために、私たちはどう関わるべきなのか。物的環境と人的環境を充実させていくことで、人と組織の活性化を図り、子どもたちと職員の「ゆとり」と「笑顔」を増やしていきたいと思っております。

4月と5月の合同カンファレンス、6月のラウンドテーブルでは、耳慣れない単語に戸惑い、畑違いの経歴に場違いさを感じながらも、多くの先生方とお話しさせて頂くことは、刺激的で大変勉強になっております。これからお世話になる教職大学院の先生方、そして院生の皆様との出会いを大切に、色々なことを学ばせて頂きたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

坪川 美穂 つばかわ みほ



今年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました坪川美穂と申します。平成6年に福井大学教育学部小学校教員養成課程を卒業し

てから25年。再び福井大学で学ぶこととなり、大学構内に足を踏み入れる度に、大学生だった頃のことをいろいろと思い出します。7月になり暑くなってきたからでしょうか。当時、私は水泳部に入部していたのですが、「24時間耐久レース」というイベントがあり、チームのメンバーで交代しながら24時間泳ぎ続けたことがなつかしく思い出されます。自分のことながら、よくそんなに泳げたものだと思ってしまう。今も泳げるのか、全く自信がありません。

大学を卒業してからずっと高校に勤めていましたが、現在は福井県教育総合研究所に勤務しています。研究所は、管理室、教科研究センター（小中学校教科研究課・理科教育課・高校教科研究課・新教育課題研究課）、先端教育研究センター、教職研修センター（教員研修課・専門研修課）、教育相談センター、教育博物館で組織されています。私は教育相談センターに勤務して3年目になります。業務としては、来所・電話相談、訪問研修などを行っています。教育相談セン

ターには、小中高の教員だけでなく、心理職、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーも在籍しています。また、現職教育や学校サポートプログラムの実践などで、いろいろな学校へ行く機会があります。これまでほとんど関わることがなかった職業の方や違う校種の先生方とお話することが増え、日々、多くの刺激をもらっています。それと同時に、自分自身が学び続けること、そして協働することの大切さを改めて痛感しています。

福井大学連合教職大学院では、実践と省察をくり返しながら学びを深めていきます。入学してからこれまで、合同カンファレンスやラウンドテーブルなどで、いろいろな方と語り合う機会をいただきました。実は私は、自分の考えをまとめて話すことや、話を聴いてそれに対する自分の意見を言うことが非常に苦手です。なかなか考えていることが言葉にならず、フリーズしてしまうことも多々あります。しかし、以前聞いたことのある「苦手なだけなら大丈夫。繰り返し練習していけば上手になる。」という言葉信じ、成長した自分に会えることを楽しみにしながら、前向きに充実した2年間を過ごしたいと思っています。私がフリーズしているときには、どうか温かい目で見守っていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

西岡 晃未 にしおか てるみ

はじめまして。この度、連合教職大学院学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました、西岡晃未と申します。よろしくお願いいたします。

福井県立丸岡高等学校に勤務いたしまして、6年目を迎えます。高等学校勤務以前は、小学校に6年、中学校に5年勤務いたしておりました。下は7歳から上は18歳まで、幅広い年齢層を相手に過ごしてきました、その折々で、子どもたちから多くのことを学びました。小学校勤務時代に担任をした児童に、数年後、高校生になって教科担当として出会うこともあり、今、目の前にいる子どもたちへの対応はもちろん、その子どもたちの将来にもしっかりと目を向けて、日々取り組んでいくべきだと再認識いたしました。児童生徒たちの将来がより素敵なものになるために私にできることは何だろう……。そのよ

うに考えていたときに、教職大学院の話を聞きました。最初は、仕事をしながら学ぶことはできるだろうか、かなり不安でしたが、一步を踏み出すには今しかないと思い、教職大学院に通うことを決めました。

今年度、丸岡高校は「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」に指定されております。学校内を取りまとめる事務局が発足し、さまざまな活動等が計画されました。「Think globally, act locally to make your dreams come true.」（身の周りの事象や地域の課題をグローバルな視点で捉えて行動し、自己実現を達成する）という校訓のもと、丸岡高校の教職員みんなが一つになって、試行錯誤しながらも、よりよい丸岡高校を作っていくために仕事に励んでいます。私も、生徒たち一人ひとりが「グローバル」の面、「ローカル」の面の両方で、思考し、表現し、成長していけるような活動に取り組ん

で行きたいと思っております。前年度までも多くの行事や取り組みがありましたが、以前のものをただ踏襲するのではなく、少しずつでも、私なりの捉え方・考え方で取り組めるようになりたいと思います。

その第一歩として、生徒たちが成長できる場面、担当の部活動でやることを頑張ってみようと考えています。私は、今年度新たに創部された「地域協働部」の顧問を任されました。教職員数と生徒数の減少等により、前年度までの「手芸・食物部」と「JRC部」を合併させてできた部活動ですが、より地域に密着した部活動になるように、と生徒たちと共に考えた部活動名です。前年度までの主な活動である「そば打ち」やお祭りへの参加だけでなく、できるだけ地域に出掛けていけるような活動を考えていきたいです。幸いなことに、一緒に顧問をしてくださっている先生がたくさんのアイデアをお持ちで、いろいろな提案をしてくださいます。新しい活動に取り組む上

で、大事にしていることは、「生徒たちも教員も、そして、関わってくださる地域の方々も、みんながお互いに楽しくワクワクできるような活動にしよう」ということ。一生懸命になりすぎると、どんどん追い込まれて苦しい状況になってしまいます。そうならないように、顧問同士で話をするときは「ワクワクできる活動であるか」（もちろん活動の目的はしっかりと持っていなければいけません、）を基準に考えています。そのおかげもあってか、少しずつではありますが、生徒たちの「地域との協働」に対する気持ちに変化が見えてきたような気がします。

大学院での学習も、「地域協働部」の顧問も、「グローバル型推進指定校」事業も、まだまだ始まったばかりです。先が見えなくて不安になることもあるかもしれませんが、少しずつ自分のペースで進んでいきたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

見えない“なにか”を求めて

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 家高 里佳

大暑を控え、夏を予感させる生き物たちの声が聞こえ始めたこの頃。2年目へと突入した教職大学院での学びは季節とともに過ぎ行き、早くも3か月が経った。長期インターンシップでは昨年度以上に様々な視点で子どもたちや授業を捉える機会を得、週間カンファレンスにおいては本格的に運営を担うようになっている。

入学前から自身が教職大学院で学びたいこととして、「通常学級において、様々な特性を持った子どもたちとどのような学級をつくるか」を掲げていた。月日を経ても自身の探究課題の文言に大きな変化はないが、用いられているそれぞれの言葉が、これまでの学びを経た自分なりの思いや考えによって色づき、新たな価値や見方・考え方が加わることで、この課題

に対する自身の探究が深まりを生んでいると実感している。

現在、私が焦点を当てて考察しているのは“学級をつくる”の部分である。子どもや学級と長いスパンでかわらせていただくインターンシップにおいて、“授業づくり”＝“学級づくり”なのだということを身にしみて感じてきた。しかし教科の学習の中で、具体的にどのような働きかけが学級づくりにつながるのか、なかなか手立てが見えなかったことも恥ずかしながら事実である。その気付きは、インターンシップに臨む際の一つの視点として自身に備わり、メンター教諭がどのような技で学級を作り上げていっているのかを分析してみたいという思いに至った。そして、その技が子どもたちにとってどのような作用

をもたらすのか、先生はどのような意図をもって行っているのかを探りたいと思った。そしてそれを基に、自分が思い描く学級づくりに対して教師として大切にしたいことを考えるようになった。まずは担任として、①学校生活における子どもたちの様子（いいところや頑張っているところ、課題とするところ等）をどれだけ敏感に捕えることができるか。（子どもたちと過ごす時間を大切にしているか？子どもの発言にとことん耳を傾けているか？子どもたちの思考の流れを感じているか？）②子どもたちについて捉ええたことをどのように学級に返すか。（そこから子どもたちが何を考え、学んでいくのかが自分の中で見えているか？自分が伝えたいことばかりになっていないか？子どもたちの文脈の中で捉えられるものになっているか？）この2つが現時点で自身が学級づくりにおいて大切にしたいと考えている担任の最も重要な要素である。そして、この2つは子どもたちと係わるすべての時間において当てはまるべき事項であると感じており、授業においてももちろん子どもたちの声をよく聴き、その思考の流れを大切に育んでいく姿勢は欠かせない。この2つをベースにしつつ、“育てたい子どもの姿”に向かって必要な要素を適宜組み込み子どもたちと学習を進めていく必要があるのだと感じている。

ただ、この“育てたい子どもの姿”について、時代とともに求められているものとの間に齟齬が生じていないかという点には十分気をつけなければならないように感じている。今年度の木曜カンファレンスの午後の部では、公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習として『探究的学習を支える〈評価〉のデザイン』に取り組んできた。予測不可能な時代の変化と共に求められているのは、自分自身で考え、アプローチしていく力（考える力や考え抜く力等）であり、「未知の状況の中でどうアプローチしていくのか」「状況を展開していく有効なアプローチを考えられるか」といった力であると言えるだろう。このような

状況を踏まえると、これまでの教育では学習者にとってなるべくストレスが無いよう学習が進められるようにと考えられてきていたが、これからの教育では、自分たちでストレス（葛藤）と向き合い学んでいく力を育成する必要があるのではないかと考えられる。そして実際に現在進行形で入試改革は取り組まれており、総合学習をベースとした探究的な考察が問われるような問題が扱われるようになってきている。子どもたちがそのような力をどのようにして身に付けていくかという点も課題であるが、私はそれをどう評価するのかという点も非常に大きな課題と感じている。なぜならそこでは、これまでの測定（評価者の判断のない、誤字脱字等のポイントを設けて加点する等誰にでもできるもの）ではなく、評価（価値についての判断を要す、評価者そのものが考えを深められる目利きができる人でなければならないもの）を行う必要があるからだ。目利き者になるためにはとにかく膨大な量の資料と解答に目を通し、またそれらを読み込まなければならない。さらに、各々の評価の視点を複数人ですり合わせていくのだが、それがまた非常に骨の折れるものであるということを実際に評価に挑戦する中で痛感した。今回の木曜カンファレンスでは入試改革を視野に入れ記述式の解答を評価するという事に挑戦したが、実際の活動を評価する際にも、何を見とり何を評価したらいいのか、資質・能力のどの部分にあたるのか等評価の困難さが予測される。一体どうしたらよいのだろうか…。

少し“なにか”が見えたかと思えば、また見えない“なにか”にぶつかる。院生生活はまさにその繰り返しである。これを踏まえれば、今見えているつもりになっているものもまだまだ見えない“なにか”へ向かう途中の暫定的のものであると言えることができる。そんな一進一退を繰り返しながらも、着実に何かを掴んでいっている自分がいることを信じて、残る半年も見えない“なにか”を求め続けていきたい。

週間カンファレンスでの私の学び

授業研究・教職専門性開発コース2年/

福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程 澤崎 俊之

昨年度もこの時期にインターンシップ/週間カンファレンスのニュースレターの原稿を書いたなあ、

今年度は何を書こうかなと思いながらも、教員採用試験が数日後に迫っており、本稿を書いている場合

でもないなあと思いつつも本稿の締め切りが迫っているため、早速本稿を書いていこう。今回は、タイトルにあるように週間カンファレンスで私が何を学んでいるのかを書いていきたい。

色々な方からよく「週間カンファレンスとは何か？」と聞かれるため、簡単に週間カンファレンスの中身について紹介しておこう。週間カンファレンスは毎週木曜日に実施されているため、木曜カンファレンスとも呼ばれているが、ある先生曰く、正式には週間カンファレンスと呼ぶらしい。週間カンファレンスの活動内容は、午前の部と午後の部に分かれている。午前の部の活動内容は、インターンシップで得た学びを大学院の先生方と共に4~5人のグループで語り合いながら振り返ることと、インターンシップにつながるであろう記録の作成や探究的な授業のデザインについて協働で学んでいく。午後の部は、公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習（探究的な学習）の問題づくりと評価の作成ということで、OECDのPISA調査問題を大学生版に改良していき、テーマに沿って、探究的な学習をどのように展開させていくのかという提案を解答する問題とその解答の評価を協働探究チームで作成していく。上記で紹介させていただいた内容は前期の活動内容であり、後期は前期で得た学びを生かしつつ、また違った学びに取り組む。そして、午前の部も午後の部の活動内容のどちらも柳澤先生をはじめとする大学院の先生方の提案や助言を基に、院生主導でこれらの学びが展開していくように院生同士でデザインし直し、デザインし直したものを院生自身が取り組んでいく。以上が週間カンファレンスの中身である。

では、このような週間カンファレンスの中で私が何を学んでいるのかと言われたら、「探究的な学びのデザイン力」であろう。週間カンファレンスの内容は

探究的な学習なものが多く、探究的な学習のねらいを定めた上で、時間などの制約や院生1人1人の能力などにも配慮しつつ、このねらいを達成するための探求の流れを構想していく必要がある。つまり、週間カンファレンスにおいて私は、院生相手に探究的な授業をデザインし、実践しているのだ。この院生向けの探究的な授業のデザインが非常に難しい。院生1人1人の力量は様々であり、興味・関心もまちまちであるため、構想していた流れ通りに進むことはまずない。何パターンか探究の流れを構想し、いくつかの探究の着地点を決めておく必要もある。そのため、うまくいったという手応えを感じることは少ない。また、この探究的な学習のデザインを1人ではなく、5~7人のチームで決めていくため、チーム内のメンバーの賛同や協力が欠かせない。いつも私が主に提案する展開に文句も言わず、賛同し、協力してくれる院生には、感謝してもしきれない。このように院生相手に探究的な学習をデザインし、実践し、振り返り、修正し、次の実践に臨むという試行錯誤に取り組む中で、私はまさに「探究的な学びのデザイン力」を少しずつ身につけているのだ。この力は、子どもたち相手に探究的な授業をデザインしていく際にも生きてくるだろう。子どもも1人1人の力量は様々かつ、興味・関心もまちまちであり、何パターンか探究の流れを構想し、いくつかの探究の着地点を決めておく必要がある。さらに、相手の思考の流れをシミュレーションして、探究的な学習をデザインし、実践していくという面では、院生も子どもも本質的に大きな違いはないはずである。よって、院生相手に探究的な授業をデザインしてきたことが子どもたち相手に探究的な授業をデザインしていくことにも生きてくるに違いない。この「探究的な学びのデザイン力」をさらに培い、次の「授業実践」に生かしていきたい。

『2年目の学び』

授業研究・教職専門性開発コース2年/

福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 桑原 寿々奈

教職大学院2年目が始まって早くも3ヶ月が経った。M2になり、M1の頃と比べると、インターンシップや木曜カンファレンスでの学び方が少し変化したとを感じる。

まずインターンシップについては、M1の時はインターンシップに週3回行っていたのだが、M2になって

からは小学校免許プログラムの授業や教員採用試験の勉強等で基本的に週1回のインターンシップとなった。そして、4月からは、6年生の新しいクラスに入らせていただいている。M1の時は1年生のクラスだったのと、インターンが週3回から週1回になって子どもと会える機会が減ったこともあり、最初は

子どもとのコミュニケーションの取り方や信頼関係づくりに悩むことがあった。3か月が経ち、子どもたち一人ひとりと“心地の良い距離感”というものがあるということを知り、今はそれを少しずつ掴もうとしている段階である。

また、インターン生として、長期的にクラスを見ているからこそ見えてくる課題もあった。自分は、その課題に対してどのようにアプローチをしたら良いのかを考え、更に、担任の先生はそれにどのようにアプローチをしているのかを見て、そこに対する想いをお聞きし、話し合うことで、また考え、更に木曜カンファレンスに持ち帰って他の院生に相談することによってまた考えた。その中で、クラスの課題が、自分自身の課題となっているということに気が付いた。M1の頃より課題意識を持ってインターンシップができていないのではないかと感じているのと同時に、考えて、考えて、「ああでもない」「こうでもない」と言った「葛藤」がインターンシップでも学びであると実感をしている。

一方、木曜カンファレンスでは、4月からM1が新しく入ってきて先輩になった。昨年、頼りにしていた先輩方が卒業され、前期は私達M2が主体となって木曜カンファレンスを企画・運営している。4月からは「学びの振り返り」、「授業づくり」、「PISAづくり」を主に行ってきた。

まず、「学びの振り返り(インターン先での学びや直面した課題等について話し合う時間)」では、M1の院生が、自分がM1の時に直面した課題と同じようなことに悩んでいると感じることが多かった。その中で自分が、M1の院生に自分のM1の時の経験を話している姿は、1年前では想像もつかなかったことである。更に、グループでの話し合いを円滑に、そして活発にするためのファシリテートをM2が担当する機会が多かった。私は、ファシリテートに対して、かなり苦手意識があったが、どうしたらみんなか話しやすく、話し合いが深まるファシリテートができるかを考えるようになった。

「授業づくり」では、国語(6年生「ようこそ、私たちの町へ」)に総合的な学習の時間を絡めた大胆な単元構想を作っていた。しかも、1回りの単発な単元構想ではなく、年間を通して、そのサイクルを3回行うことによって深めていく構想である。このように、単元で授業を捉え、その中で学びが繰り上がっていくようにサイクルを組んでいくという授業構想は、福井大教職大学院での学んだことの一つである。最後に「PISAづくり」だが、PISAの担当となった私にとっては、今回評価までいけたことは、PISA班としては財産になった。最初は、評価を行うって決まってもどうやって形にするか見当もつかなかった。しかし、PISA班や柳沢先生と協働していく中で、何とか評価を文章で伝えることができた。またPISAの評価を行う上で、探求の評価についても考えいった。現在の新学習指導要領では、授業において(特に総合的な学習の時間において)子どもが探求する学習が推進されている。そのような探求型のアクティブラーニングが推進されていく中で、子どもたちが提案する探究をどのように評価し、探求の過程を評価するのかということは、これからの学校教育において直面する課題であると感じる。今回、探求の提案を評価し、それについて考えたことは、小さな一歩かもしれないが私の中では大きな一歩となった。探求の提案の評価については、「それまでの資料を吟味した上での探求のテーマになっているか」、「提案された探求の方法が、よりテーマを深められそうか」といった観点で評価することができた。しかし、探求の提案の評価としては、他にも観点があるかもしれない。また、教師側も「他に探求のテーマを深められそうな方法があった場合、どんな方法があるか」等と、評価をしながら共に考えながら行うことが大切であると感じた。

このように振り返ってみると、昨年より福井大教職大学院での学びにも慣れてきたと感じる。M1の頃よりも更にレベルアップした『2年目の学び』ができるよう精進していきたい。

実践研究福井ラウンドテーブル

Summer Sessions 2019 報告

視点を改めて 何度でも自分の実践を捉え直す

学校改革マネジメントコース2年／福井市六条小学校 寺前 公恵

ラウンドテーブルに参加すると、いつも何とも言えない充実感を味わうことができる。そこに集まる人たちの学ぶことへの強い思いに勇気とやる気をもろう。めまぐるしい忙しさの学校現場から、ちょっと離れ、リフレッシュするような、そんな感覚である。しかし、今回はそうも言っていられない状況であった。ZoneCで清明公民館の金木美東里さんと二人でシンポジストをさせていただくことになったからである。テーマは、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」であり、サブテーマとして、「地域と学校のつながりを編み直す」が掲げられていた。私は、これまで、自分の実践を、何度か発表させていただいているのだが、そのたびに、テーマや聴き手のニーズを考え、発表内容を吟味してきた。今回は、学校関係者より、どちらかと言えば、各公民館の主事さんが多く参観される。「どうすると主事さんに伝わるのか・・・」手直ししている、その時間もまた捉え直すきっかけになった。シンポジウムでは、独りよがりな一方通行の発表にならず、聴き手の思いに耳を傾け、自分がその場で感じたことを大切にしようと思っていた。どんな思いが湧き出るか楽しみだった。

しかし、発表前の打ち合わせの時に、もう、その瞬間はやってきた。コーディネーターの水野先生から「持続可能なコミュニティ」について丁寧に説明してくださった上で、事前に質問内容を教えていただいた。地域と連携した総合の実践の中で、「①子どもたちの関係性の質がどう変わったのか。②自然とのかかわりで、体験以上の学びが深まったことについてはどうか。③地域の方の願いを子どもたちはどのように受け止めたのか。」である。聞きながら、私の頭の中は大変なことになっていた。思いはあふれるほどある。いろいろなシーンがぐるぐると早送り登場し、私は必死で言葉を紡ぎ出そうとしていた。水野先生からは、「持続可能なコミュニティ」のお話の中で、「もしかすると、いじめにあった子や傍観者の

地域へ戻りたい思いを壊しているかもしれない。そういう子たちが、総合によってどんなふうになっかっていったのか」と言われたこと。強く心に残っている。「私は、あの子たちを地域に戻りたいと心から思える子どもたちにすることができたのだろうか・・・」自問自答しながら聞いていた。「できた」と言い切る自信はない。しかし、間違いなく言えることは、生き生きと活動している子どもたちの嘘のない姿がそこにあったということである。水野先生からのお言葉で、改めてその視点で捉え直すことができた。

司会の富永先生からは、シンポジウムのはじめに参観者に対して「公民館にあって、学校にないもの。学校にあって公民館にないもの。2つの似ているところと違うところはないか」という呼びかけがあった。私は、シンポジウムの間、ずっとそのことを考えていた。金木さんの「子どもの思いを大切にする。待つ姿勢」には大変共感できた。しかし、学校現場には、公民館のような「背中を押す」「子どもを待つ」指導には限界があるのではないかと感じている。公民館には、緩いつながりや選択できる面白さ、家族的な雰囲気、大学生で言うならば、サークルやバイトのような、絶対的、強制的ではない空間がそこにはある。居場所を求めてふらっとやってきて、そこでつながる仲間がいる。制約はあるとしても、そのことだけに浸る時間がある。公民館で様々な行事があるように、学校でもプロジェクト学習や行事を創り上げる機会はある。しかし、教師はただ見守っているだけでなく、そこに教科としての知識・技能や学び方の力を身につけていく使命があるのだ。時間数などの細かな制約もある。それでも、私は、個人的に、教員にできる「一人一人の子どもをじっくりと見ること。子どもを待つこと。子どもの思いに寄り添うこと。」を大切にしたいと考えている。富永先生により、金木さんと、それぞれの立場で、わかり合えた気がした。

参観者の玉川大学の濱田先生からは、「フレーム」の話があった。2日目のグループ討議でも松木先生から出てきた話題なのだが、「一度活動を行うと、同じフレームに先生方はあてはめなくなる。各学年ごとのテーマが決まってくる」それは、カリキュラムのことであった。「その同じフレームの中で、活動を組み替えようとしたことがおもしろい。」と言われた。

「地域に巻き込まれる活動」の視点で伝えた「米作り」の実践について、お二人の先生方に、そういう形で捉えていただけて、大変勉強になった。

そのほか、松木先生からは、「インクルーシブ教育」「プロジェクト学習」についてのご意見もあった。「気がかりな子どもも含めて一人一人が活躍できる学習」である。国語・算数では、スタートからゴール

まできちんと習得させることもあり、立ち位置がばらばらでは困るけれど、総合ならば、それぞれの立ち位置や思いで活動を進めていく利点があるということをおっしゃっていた。濱田先生からは、地域の最も重んじている宝（人・もの・こと）が学習の材であるならば、それは子どもたちにとっても重要で、だからこそ、学びは深まるのではないかとされた。

ラウンドテーブルのよさは、聴き手の方から様々な視点でご意見をいただき、自分の実践を、何度でも違う視点で捉え直すことができるころだと改めて実感している。今回、水野先生、矢内先生、半原先生、富永先生の、鋭くもあり、温かなご助言のおかげで、安心して、自分と対話しながら捉え直すことができ、深く学ぶことができた。

ラウンドテーブルで改めて気づいた「対話の大切さ」

学校改革マネジメントコース2年／坂井市立加戸小学校 藤野 秀樹

1日目 ZoneA 「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」

福井大学附属義務教育学校前期課程の五十嵐洋行先生の「社会創世プロジェクトのデザインと実際」という発表をお聞きした。長期的なプロジェクト型学習を積み重ねることで「社会に意思をもって生き、自律的な学びができる子供を育てるために必要な資質・能力」の研究開発という課題に向かって協働しているということだった。その協働体制について紹介された中で、前期課程・後期課程合同の教科部会が時間割上に組み込まれているということが素晴らしいと感じた。また、月1回のペースで開かれる研究会だけでなく、職員室の座席にもフリーアドレス制を取り入れているとのことをお聞きし、「協働」していくための「対話」の重要性を意識されているからこそその取り組みなのだなと感じた。

続いて、福井県立若狭高等学校の小坂康之先生の「探究的な学び」という発表をお聞きした。高校での探究的な学びをデザインする取り組みについての発表だった。研究部が中心となって行う打ち合わせだけではうまくいかないとのこと。そこで、探究的な学びを支えるコミュニティとして、①授業研究会②若手指導力向上塾③「探究」のつどいの3つがあるとのこと。お話をお聞きして、公的な組織だけでは、「やらされ感」は払拭できない、教師の学びが続いていく

ためには、自主的なコミュニティづくりが必要なのだなと改めて感じた。

お二人の発表を受けてのシンポジウムでは、大谷大学文学部教授・福井大学連合教職大学院客員教授の荒瀬克己先生のお話が心に残った。改訂された学習指導要領の前文にある教育課程についての定義・目標について触れられ、「これからの学校には、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識することができるようにすることが求められる。」というのは、現状の裏返しではないかと話された。また、いろいろと「自己肯定感」の低さが指摘されているが、「主体的に」学ぶには「自己肯定感」があってはじめてできるので、「探究」は、学びの主体が「子ども」であるので、学びの中で自分のよさや可能性に気づくことができるということも話された。そして、そのようにできるように学校の中で話し合い、計画、実行し、振り返るというサイクルの中で実現するとよいというお話だった。

シンポジウム後のフォーラムでは、メンバーは、幼稚園の園長先生、コンサルタントを目指している高校の先生、単位制の定時制高校の先生、小学校教員2名、そして、若狭高等学校の研究部に所属する村先生の6名だった。話し合いは、村先生の「『探究』の学びが教職員に思うように伝わっていない。」という悩みに他のメンバーがアドバイスする形になった。その中で、「求めすぎではいけない。」という意見、「反

対の人には、『自分にはなかった視点です。』というアプローチが有効。」という意見が印象に残った。そして、なんとといっても、ここまで熱く語れる2年目の先生がいることに大変驚いた。

2日目 クロスセッション

2日目のクロスセッションでは、中国出身の福井大学大学院教育学研究科の史さん、市立札幌大通高等学校の長澤先生、そして自分の3つの報告が行われた。

史さんは、日本の教員養成のシステム・歴史について研究をしているとのこと。今回は、中国における教師資格試験に関する報告であった。中国では、「教師資格試験」というものがあり、それに合格しないと、講師にもなれないとのこと。合格しても、自然に採用されるわけではなく、自分から学校へ売り込みに行くことが必要なのだそう。「ぬるま湯」といわれることもある日本の公務員とは、スタート時点で違っているのだと感じた。そして、なによりも日本語で普通に会話し、難しい日本語も当たり前のように駆使して書かれている論文から、史さんの志の高さに驚いた。

長澤先生は、2018年度の「ハニー・オブ・ザ・イヤー」で最優秀賞に輝いたハチミツをつくり販売している「ミツバチプロジェクト」についてのお話をしてくださった。実は、一部のものだけの取り組みであって、全校的な動きにはなっていないこと、賞を取ったことで有名になったのに、関わっていない生徒は何も知らないという現状であるとのことだった。担当部署を決めると、「やらねばならない」ことにな

ってしまうので、立ち上げ時のメンバーで行っているとのことだが、理科教員として、「ハチミツプロジェクト」とコラボしていけることがあるはずと模索しているとのことだった。お話を聞いて、「『やらねばならない』では長続きしない。」「小さな集団（コミュニティ）からどうやって大きな動きにつなげていくのか。」といった課題は、校種を問わず、地域を問わず共通する課題なのだなと感じた。

自分は、昨年度の長畝小学校での「よくわかる授業」づくりのための「教材研究タイム」「ミニ・ワークショップ」「授業公開週間」の取り組みを中心に紹介させていただいた。これらの取り組みのための時間をどのように生み出しているのかについて、アンケート集計など、表には出にくい、担任の負担になっている業務を積極的に引き受けることで、担任の協力を引き出していることをお話しさせていただき、ファシリテーターの木村先生から褒めていただいた。また、今年度異動した加戸小学校での勤労生産学習について紹介する中で、総合での取り組みが教科につながったり、「探究」のテーマとなり得る可能性を教えていただいた。

新たに人間関係を築きながら取り組んでいくことになる今年。これまでの取り組みが間違っていなかったことを確認でき、少し自信を持つことができた。そして、はるばる福井まで「学ぶ」ために来てくださった先生方や「熱く語る」先生方の情熱に触れることができ、大変刺激を受けた2日間であった。

これもラウンドテーブルに参加したからこそである。この機会を与えていただいたことに感謝して、「対話」を大切に取り組みを進めていきたいと思う。

福井ラウンドテーブルに参加して

学校改革マネジメントコース2年／坂井市立雄島小学校 濱辺 直美

1日目は Zone A 学校「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマでシンポジウム、フォーラムに参加した。福井大学附属義務教育学校前期課程の五十嵐洋行先生と県立若狭高校の小坂康之先生をシンポジストに迎え、多様な実践を聴くことができた。

福井大学附属義務教育学校前期課程では、「どのような子どもを育成したいのか、そのために教師のコミュニティはどうあるべきか」という理念のもと、学校独自の文化コラボを実践していった。もともと小

学校と中学校に分かれていたものを、9ヶ年全部が同じ方向性をもって実践していけるように、教師同士の対話を重ねることで創り上げていったということだった。さらに、「社会創世プロジェクトと教師協働」という文科省からの研究指定があり、教科と社創に分かれた教師の協働体制を立ち上げ、探求サイクルの構築や月に1回の社創研、職員室の机の配置を決めないフリーアドレスなど、様々な実践をされていた。子どもたちの探求的な学びは中・長期的なものであり、長いスパンで形成されていくものだと考え

るが、義務教育学校での実践は現代教育の最先端を行くものであろう。また若狭高校の小坂先生の実践は、「普通の授業に探求活動を取り入れる」という趣旨で、学校というコミュニティの中に教科や年代、探求に対する各自の思いを越えた組織作りへの発表だった。「生徒を通じて、教師の主體的なコミュニティを形成できる」という言葉が印象的だった。ディスカサントとして大谷大学文学部の荒瀬克己氏が、評価やカリキュラム・マネジメントについて多様な意見を述べられていた。「生徒にとって何が大事なのか」という形成的な評価をすることで、生徒がどう育ったか、どうのびたかをその都度フィードバックすることが最も重要であるとの見解だった。そして、一人ひとりの生徒が自分の良さや可能性を認識することが、自己肯定感や自己有用感につながり、主体的に学習する素地をつくっていくという言葉は、大いに共感できるものであった。

2日目は、「実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る」クロスセッションが行われた。私は「教師の協働で実践がつながる校内研究」というテーマで昨年度の実践と今年度の展望を報告させていただいた。具体的には、現任校での研究主任として、公開授業の持ち方や校内研究の進め方、さらに職員間での指導力、授業力の向上のための実践や、音楽が専門の自分にとって離れられない音楽会での指導から気づいたこと、行事の精選の経過などを紹介させていただいた。私が研究主任の立場になって見えてきた学校の現状や、これからの教師大量退職、若手教師の教育など、新たな悩みなどを率直に文章にしたのである。報告の後、ファシリテーターの斎藤弘子先生から、「今の教育現場で問題になっていることやこれからの課題がそのまま述べられている」「教師が直面している大事な問題を、どう解決していくとよいのか、どうするのがより良い方向なのか」という言葉をいただき、自分でもまた再考することができた。そして今年度新たに組みたいと考えている授業公

開 week や校内研究の内容について、職員が同じベクトルで取り組んでいけるよう、独り相撲ではなく協働の態勢をとりながら実践していきたいと強く感じた。グループには、藤島高校1年生、教職を目指す福井大学の3年生、奈良女子大学附属中等教育学校の教諭、公民館主事などがいらっしやった。それぞれ違う立場での意見をいただき、たいへん有意義な時間をもつことができた。福井大学の探求活動の報告や、奈良女子大学附属中等教育学校の「コロキウム」人生幸福論の報告もたいへん興味深く聴かせていただいた。実践の形は多種多様で、どの報告からも大きなエネルギーを感じることができた。

ラウンドテーブルのクロスセッションは、立場も年代も違う様々な方と出会い、自分のものさしだけでは測ることのできない実践や考えに触れることのできる貴重な機会である。地元の大学を卒業し、地元の学校でだけ動いている自分にはない、新しい世界を知ることができ、今回も新たな収穫があったと実感している。現任校では今年度、職員の大幅な異動があり、学校全体の態勢の変化を求められていると感じる。これまでの積み重ねや経験を踏まえながら、より良い方向へ向かっていけるよう、ラウンドテーブルや教職大学院での経験をもとに研鑽を重ねていきたい。



福井ラウンドテーブルを終えて

授業研究・教職専門性開発コース2年／奈良女子大学附属中等教育学校 西澤 央泰

実践研究 福井ラウンドテーブル 2019 Summer Sessions を終えて、自分が感じ、考えたことを書くために、自分がこのラウンドテーブルという場をどういう場としてとらえていたのかを書いておきたい。

自分は、ラウンドテーブルに参加させていただくのは、院生としては2年目になるが、1年目はこの場が何のために存在するのか、何が自分の学びにつながるのかがはっきりとはわからなかった。大学院入

学後 1 年目の時には、クロスセッションで、英語を母語とする方々とテーブルを共にし、自分のインターン校の特徴や自分の取り組みの紹介を英語で行った。確かに英語で自分の周囲のことを紹介するという取り組みは、自分の英語力の向上や自分のことについて再確認する機会にはなったのかもしれない。だが、大学院入学から間もなかった私にとって、「自分の実践」を語っているという感覚にはならず、本当にこれがこの学びになっているのかと疑問に感じた。また、同時に他の先生方の実践を聞かせていただく機会を得ることもできたが、例えば、学校改革のための実践の報告は、自分には遠いことのように感じ、自分事のようにとらえることができなかったのを覚えている。他の先生方の実践に対し、自分が発表した内容は実践とは呼べず、自分はここで発表するに値するのかという気持ちになった。

それから 1 年が経った。この 1 年間の中で、自分でも何か実践を作り上げようと学校の中で様々な取り組みを行うことができた時もあれば、何をしたいのかわからず、途方に暮れ、思考が停止し、何も考えられず、先生方から厳しく指導していただいた時もあった。そのような紆余曲折を得ながら、ここまで行ってきたことと、それに対して自分がどう考え、この先を行動しようとしているのかを 2 日目のクロスセッションで先生方に報告させていただいた。この時、自分の去年 1 年間の実践を生き生きと語ることができる自分に気が付いた。「自分の実践」を語ることができていると感じた。これは私自身がこの 1 年間先生方から指導され続けてきた「考えて、動く」ということをしてきたことによるものであると思う。自分自身が学校内で起こることを「自分事」としてとらえ、自分にできることは何か「考えて、動く」ことによって、「自分の実践」をしているという感覚になれたからであると思う。また、そのことを、同じテーブルの先生方にお話させていただいた時に、1 人の先生から、「「考えて動く」ということは現職の新任の先生でも難しいこと。それを、インターンの中から学び取って、実行しようとしていることはすごいことだと思う。」というお言葉をいただき、自分自身がこの大学院で体得しようとしていることは、社会に出た時にも必要とされていることであるということを実感した。大学院生活が始まった後に、自分の成長を感じる機会は、それほど多くなかったと思っていたが、同じ、福井ラウンドテーブルという場を時系列で振り返ることによって、自分自身の成長を感じることであった自身の報告の場であった。

加えて、自分が感じた変化に関して、他者の実践への共感や考えることができるようになったことも挙げられる。先述の通り、自分は他者の実践を聞いたとしてもどこか自分事として捉えられず、情報だけを得ようとしている節があった。だが、今回、ある先生の実践の報告を聞かせていただいて、自分自身の感情が大きく揺さぶられることになった。その先生は、ベテランの先生であるが、今年の春に福井大学教育学部附属義務教育学校に赴任されてからの授業観のシフトチェンジを求められている。これまでは一般的な公立の中学校で、教科書の内容を丁寧に見ていく指導を 25 年間続けてこられていたが、授業のデザインを一新することになった。担当教科の教員は先生以外におられず、相談しながら授業を考えられない苦労や、自分をどのように良くしていけばいいかについて一度生徒と腹を割って話してみたいと思っていられしやることなどをお聞きし、このようなベテランの先生でも思い悩むことがあるということや、生徒と腹を割って話そうとする先生の勇氣に感服した。自分自身がこの報告に感情を揺さぶられたのは、自分自身もこの大学院に入学してから、所謂知識詰め込み型の学びの仕方から、課題を設定して、その課題を乗り越えるにはどうすればいいか考え、実践し振り返りを行うという学びの仕方に変化のために取り組んでいるからであり、この感情自体も自分が、「考えて、動く」ということに挑戦しているから出てきたことであると感じている。

自分が考えて動いたことには、自分の感情が乗り、それだけ他者の実践にも共感することができるようになる。「考えて、動く」こと。自分にとっては、まだまだ体得しきれていないものであり、これから克服していかなければならない課題である。だが、大学院に入学してから少しでも自分の学びの仕方が変化していると感じることができたのは、このラウンドテーブルという機会のおかげである。



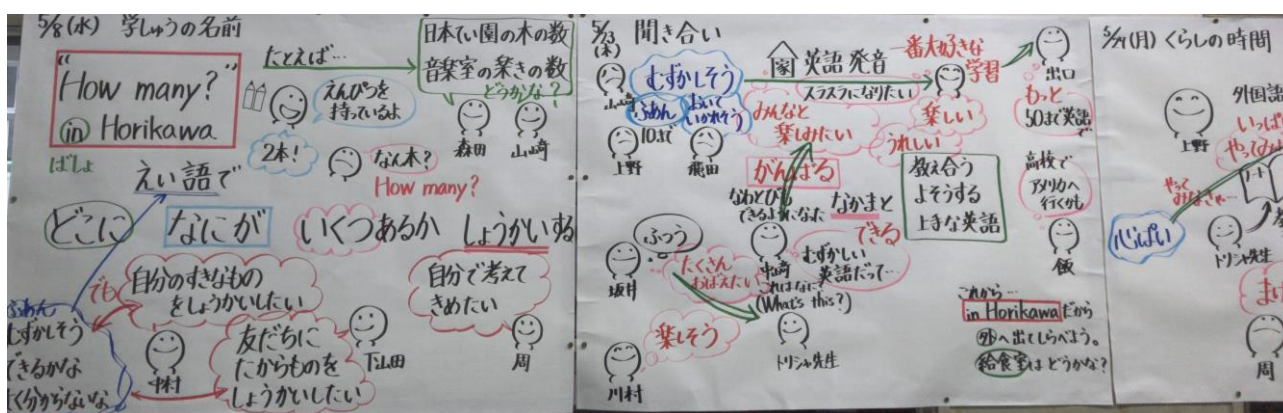
研究集会・公開研究会などの報告

堀川小学校教育研究実践発表会に参加して

福井大学連合教職大学院 特命助教 王 林鋒

5月31日（金）、6月1日（土）二日間にわたって富山市立堀川小学校で開催された第90回教育研究実践発表会に参加しました。堀川小学校では、「個が育つ教育経営」を実践目標に、平成27年度後期より、「個の学びと教育」を掲げた研究主題の下で研究を進めています。「個の学び」を実現するには、くらしづくりにはたらく教育活動、いわば「朝活動」「くらしの時間」「授業」「自主活動」といった4本柱、を通して、教員同士が子ども理解に努める日々の教育実践を積み重ねています。二日間の教育研究実践発表会では、14教科の19人の教員による76時間の授

業を公開されました。教科に分かれて、富山大学の指導助言者14人、研究協議部会の指導助言者を務める教育事務所の指導主事や小学校の教頭14人及び協力者として他校の教諭19人が関わったことが研究紀要に掲載された一覧表から分かりました。公開授業の数、研究協力者の人数から学校の研究体制の成熟度の高さを伺えます。実は、去年に引き続き、今回堀川小学校の教育実践発表会に行ったのは2回目でした。去年に見えなかったことや今年に明らかにになったことはたくさんありますが、ここでは、2点を共有したいと思います。



様々な記録から読み解く子どもの追究と授業

各段階の様々な記録を積み重ねることで子どもの追究と授業の展開を追うことが可能になっています。各教室には追究単位に入ってから本時までの学習プロセスを記録するポスターを貼り付けられていました。ポスターは、くらしの時間や授業の聞き合い場面で子どもたちの発言を丁寧に描かれています。子ども一人一人の思考変容や成長過程を追うことができます。また、午前中の公開授業においても、今日の目当てを立てる際に教員が子どもたちが語った目標を板書に書いて、全体に共有し合っていました。さらに、午後の協議会では、先日のくらしの時間（3回

分）及び授業（1回分）の会話を記録したトランスクリプトを配布資料として12ページの記録を配られました。それに合わせて、追究単元の目標、子どもの育ち、教材について、子どもの追究と教師の支援、公開授業の追究過程及び展開を書かれたものを研究紀要に掲載されています。様々な記録によって、本時だけではなくて、単元デザインや子どもたちの学びの背景にある出来事もわかることが可能になっています。さらに、特定の子どもの歩みとその考察を中心に書かれた実践記録は研究紀要、教育実践誌、堀川小学校の著書に掲載されています。参観者の中には、一人の子の学びを二日間に記録した教員が何人かがいまし

た。それぞれ見取った特定の子の学びの前後のつながり及び深まりを語り合う姿が印象的でした。このような協議会ができたのは、長年に実践してきた二日間の公開授業研究会が参観者の見取り力を培っているのではないかと思います。

総合的な学習の時間と融合した小学校外国語活動の事例

今回の公開授業では、総合的な学習の時間と融合した小学校外国語活動のやり方を提案しました。新しい学級の仲間と担任に出会った3年生です。彼らによっては、初めて外国語に本格的に触れる単元です。生活科で学校探検や校区探検を経験して、現在社会科でも自分たちの住む町について調べ学習を行っています。単元名を「How many? in Horikawa」とし、自分の身の回りの物の数を英語で紹介することを中心に学習を進めていく10時間です。1時間目の総合的な学習の時間は、単元名の意味を知らせて、実物を見せながら尋ねたり、写真を見せながら人数を尋ねたりすることで「どこでなにがいくつあるか」の見通しをもつように示します。初めての外国語活動に戸惑い子どもたちに対して、コミュニケーション活動を繰り返しながら、一つでも取り掛かりを見つけられるように、自分のペースで安心感の中に学習に取り組むことができるようにします。2時間目から9時間目までは、教室内、校内、校区内にある物の数に興味を持ち、英語で表現することを通して感じたこと、仲間の願いや取り組みから考えることを基に、一人

一人が取り組みへの思いや願いを確かにし、意欲を高めることを目標とします。中には、外国語活動の4時間においては、コミュニケーション活動に用いる英語表現を「I (We) have pencils in classroom (musicroom) . →How many? →Five. 」とし、リズムチャンツやジェスチャーを用いて繰り返し練習してから、一人一人が英語を用いてALTや仲間とコミュニケーションを図っていきます。一方、総合的な学習の時間の4時間においては、自分の身の回りや校内にある物の数を調べたり、伝えたい物や数の英語表現をALTに尋ねたり、練習したりします。子どもたち一人一人が「自分の調べた物を紹介したい」「いろいろな物の英語表現を知りたい」「20より大きな数も英語で言ってみよう」といった目当てに向かって取り組んでいきます。伝えなかった不安や伝わった喜びと取り組みを聞き合う時間を設けます。仲間と共感したり、自分とは異なる見方や感じ方に気づいたりすることで意欲的に取り組もうとする子どもの姿を育みます。10時間目の総合的な学習の時間では、これまでの取り組みを聞きあうことを通して、自分の取り組み方を見つめ直し、くらしに生かそうとする目標を立てます。さらに仲間と共に高めあっていくことを目指して、子どもたちそれぞれが単元を通して成長を感じられる時間にします。

来年も堀川小学校の教育研究実践発表会に行くつもりです。「個の学び」と「学び合い」の結びつく場面を見つけないと思います。

エジプト研修報告

～福井市の学校を訪問した研修生の声～

El Galaa Official Language School Emad Metwaly

福井市岡保小学校を訪問しました。当日7時半に学校に到着し、子どもたちの登校の様子を見る機会に恵まれました。子どもたちがグループとなり、集団登校をしている姿に驚きました。グループの先頭と一番後ろに高学年の子どもが立ち、小さな子どもたちに気を配りながら登校していました。子どもたちがたくさんの荷物(バック)を持っていることにも気づきました。子どもたちはスクールバックに防犯用のブザーと熊よけの鈴をつけていました。エジプト

では学校の近くに住んでいても必ず保護者が学校まで送るのですが、ここでは子どもたちが自分たちで登校していました。子どもたちは学校に着いたらすぐに自分たちのクラスに行くのではなく、靴を整頓したりした後再びみんなで集まって教室に行く姿が印象的でした。

授業前、宿題をチェックしたり読書したりする時間がありました。私はそれらを授業前のウォーミングアップとして理解しました。岡保小学校では、いく

つもの授業を参観させていただきました。ある一つのクラスを見学した際、特別活動に位置づけたプロジェクト型の「ビッグワンダフル集会」のリハーサルを行っており、それは縦割り活動で行われていました。他のクラスもプロジェクトを行っており、それは安全や防災教育と結びついているものだと理解しました。そこではロールプレイやシュミレーションが行われていました。ごみの分類のプロジェクトも参観しました。そこで、ある子どもがみんなの靴をそろえる姿が印象に残りました。また、You Tuber というプロジェクトも参観しました。子どもたちがスライムを作り、それを映像にアップする経験を通じ、よい You Tuber になるために何が必要かを考えるものでした。

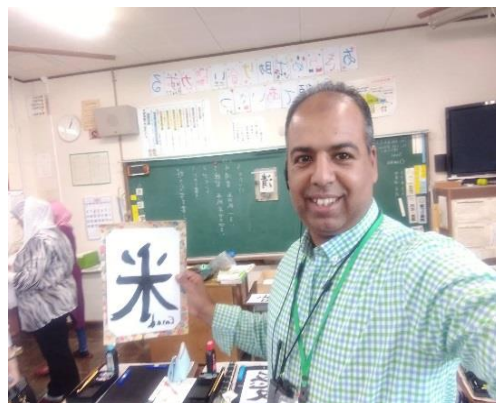
教室には魚を飼っている水槽がありました。保健室には工夫された視力検査のポスターがありました。子どもたちの出欠状況が一目で分かるボードも見ました。また、職員室と校長室がつながっているのがよいと思いました。職員室には学年ごとの箱があり、提出物等の一括管理ができる工夫を見ました。校長室で、小島校長先生のお話をうかがうことができました。とても歴史のある学校であることが分かりました。また、校長先生は以前恐竜博物館に勤めていらっしやったとのことで、校長室を訪れる子どもたちに興味を持たせるために机の上に小さな恐竜が飾られていました。

その後再び授業を参観し、ある一つのクラスで、全校にさわやかな挨拶を広める「スマイルプロジェクト」の計画について子どもたちが話し合う様子を見ることができました。このクラスは一週間の計画を立てていました。4年生の書道のクラスも見学しました。そこでは子どもたちがお気に入りの漢字を書いていました。子どもたちは、ただ漢字を書くのではなく、筆順の確認や、なぜその漢字を選んだのかも考えていました。私たちも書道にチャレンジしました。

「米」や「魂」などの漢字に挑戦しました。「米」が、お米とアメリカの略称の両方を表すのがおもしろいと思いました。給食の時間では、子どもたちが責任を

もって配膳する姿を見ることができました。音楽の授業では、「小さな花」という歌を子どもたちが歌っていました。歌う前、姿勢を整えているのが印象的でした。ALT による英語の授業も見学しました。私は英語の教員なのですが、子どもたちが意欲的に授業に参加するための工夫が随所に見られました。また、あるクラスで、子どもたちが合意形成を図る場面を見ることができました。それは自分の意見をしっかりと持つための授業であると理解しました。子どもたちに歯磨きを奨励するポスターや人形も見ました。さらに、当初の計画にはなかったのですが、私たちのリクエストに応え、校長先生が校庭やプールを見せてくださいました。

岡保小学校の子どもたちと先生方が私たちをあたたく受け入れてくださったことがとてもうれしく感銘を受けました。アラビア語のポスターもうれしかったです。岡保小学校は、子どもたちのチームワーク、先生方のチームワーク、そして校長先生のマネジメントの手腕が調和して、学校が「ハーモニー」であると感じました。子どもたちは明確な目標を持ち、ゴールを見通した上で行動していました。最初の目標を達成したら次の計画を立て、さらにその目標が達成できたら次の計画を立てるといった具合に、段階を踏みながら行動する力、遂行する力をつけていました。それはまさに社会で通用する力であり、学校教育の可能性を実感しました。岡保小学校のみなさん、本当にありがとうございました。



～学校訪問先からの声～

福井市上文殊小学校 校長 向 誠隆

6月28日に、エジプトのトレーナー3名が本校の視察に来られました。トレーナーという役職は、国における日本型教育の推進役で、先進的パイロット

校の校長先生に対する指導的立場であるという説明をいただいていたのですが、当日のお話しの中では、校長先生と一緒に学校経営を進めているということで

した。学校で生じた課題をトレーナーと校長先生が協議しながら改善策を立て、実際にどのような改善が見られたのかを短いスパンで情報交換を繰り返しているということで、まさに行政と学校が一体となって学校教育に当たっているエジプトの教育事情が理解できました。

当日はトレーナーからいろいろな質問がありましたが、その中で特に印象深かったことがありました。それは、本校の児童減少が話題となった際に、「校長として児童減少に対してどのように地域に呼びかけているのか、または関わっているのか」という質問です。ほかにも、養護教諭との面談の際に、「インフルエンザなどが流行したときに保護者に対して直接どのように働きかけているのか」という質問がありました。担任教諭との面談でも、「トラブルが起こった際に、保護者に対して直接どのように対処しているのか」という質問もあり、保護者との直接的な関わり

に関心が高いと感じました。また、改めて日本では学校・学年だよりや保健だよりといった文書を活用していることが多いということも感じました。

ほかにも、生活科の授業を見てなぜこのような就学前と同じようなこと（生き物の飼育と観察）をしているのかといった疑問や、上文殊小学校から見渡せる周囲の自然に感動して「午後の会議は外でやりましょう」と冗談交じりに話したことなどから、エジプトの教育や環境を垣間見ることができ、私自身が学ぶことができました。

エジプトの方が来校するということはめったにないので、夏休み前の全校朝礼でエジプトの位置や衣食住、ピラミッドなどについて簡単に紹介し、興味をもったことを夏休みに調べてみましょうという話につなげました。東京五輪が一年後に迫る中でもあり、いろんな国に関心が高まることを期待しています。

各地ラウンドテーブル情報

～公開研究会～

2019 札幌ラウンドテーブル

2019年 第1報
日程時間はこれで決定。
(すでに参加受付中です)
企画詳細は第2報以降です。

2019年 9月 28日(土)～29日(日)
10:00～17:00, 8:40～14:00
会場: 市立札幌大通高等学校
札幌市中央区北2条西1丁目
主催: 札幌ラウンドテーブル実行委員会

教育に関する「熟議」を主軸にした研究交流会です。

教育に関する
ジャンルレスの公開研究会です。
教師・研究者・社会教育・企業教育・学生・家庭教育
等々、ひろく教育に興味関心をお持ちの方が集い、
自身の活動を省察し、同時に他者の実践を「眼」に
聞き取る交流の中で、今後の自分の活動に資する
ような認識を互いに持ち帰る営みです。

2日間でを行います。

初日午前には基調講演の全体会、午後からは分科会に分かれ、これからの教育を考えていく着眼の1つになりそうなテーマを取り扱います。
翌日、研究会の主軸となるラウンドテーブルでは、職業、立場、校種の違いを越え、過去の経験や現在の思いを相互に交流し、気づきや学びを互いに提供し合います。テーブル毎に「報告者」はたてますが、講演会ではなく座談会です。報告中にも双方のやりとりがあり、笑い声も上がる空気のなかで行われます。

対話主体の研究会であるため、参加にあたっては可能な限り途中退席を避けてご参加いただくようお願いしています。皆様のご参加を歓迎いたします。

28日午後の分科会、今年は、A～Cの3つ(予定)。

分科会 A: (仮)「社会」自体によるキャリア育成の過程

分科会 B: (仮)「社会」との連携による学校変革の課題

分科会 C: (仮)「社会」を引き入れ得る教師とは

札幌ラウンドテーブル開催の経緯とその趣旨

本研究会は今年で4度目の実施を迎えます。福井大学教職大学院が2009年から2回ずつ開催し続けている、「実践」を軸とするコミュニティ・実践研究開発プロジェクトに参加した教員たちが、この形態での学びに可能性を感じ、札幌でも始めてみようというスタートしたのです。

また、促井で、そしてその後の福井大学でも行われた高校生と大学生のクロスセッションに参加した札幌市立高橋生徒も、この交流をきっかけに、高校と大学入試の壁を乗り越えています。

様々な立場によって行われる、全ての教育実践を可視化し、体系的で生徒の人生構築に寄与するものを探求する点に教師の専門性があることをうけ、実践のゆえを深く深く理解し、今後の教育現場が直面する問題について深く省察を加え、各人の糧にすることをねがいます。

2日間のタイムスケジュール

29(土) 9:30 受付設置

10:00 オープニング 実行委員長挨拶 事務連絡

10:20 シンポジウム「教育観の拡張深化」
(内容調整中。後日の更新でお知らせします)

12:20 昼食休憩 当日朝に、弁当の注文も可能です(当日支払い)。
売り切れた場合、コンビニ(徒歩3分)をご案内します。

13:00 分科会 事前申込したA・B・Cの分科会に分かれ、
テーマについての思考を深める場です。

分科会 A: (仮)「社会」自体によるキャリア育成の過程

分科会 B: (仮)「社会」との連携による学校変革の課題

分科会 C: (仮)「社会」を引き入れ得る教師とは

17:00 終了解散 ※事前申込された方に、このあと懇親会をご案内します。

30(日) 8:20 受付開始

8:40 諸連絡

8:50 ラウンドテーブル開始

※参加者は必ず、以下のいずれかをご担当いただきます。

- ・ファシリテータ (論議を引き出す進行役)
- ・報告者 (2名)
- ・聞き手 (テーブル論議を決定づける質問役)

14:00 各テーブルごとに解散

参加申し込み
〆切: 9月20日(金)

PC・スマホから、以下の
申込フォームでお願いします。
<https://form.os7.biz/f/a8328cfe/>

※QRコードから
でもつながります。



「報告者」大歓迎! 話題提供してみませんか?

ラウンドテーブルでは、必ず以下のいずれかの役割があります。

- ・ファシリテータ (全員から興味関心を引き出す進行役)
- ・報告者 (約90分かけ、自分が関わった実践を話題提供)
- ・聞き手 (随時沢山の質問を出し感想を述べ、論議を深める)

申込のときに、どれかひとつを選んでいただくようになっています。

報告は、タブレットなどで写真を見せたり、1～3枚程度のチラシ
(6組必要)を配布して説明するのが一般的です。

成果発表よりも、取り組んでいる中間報告が好評です。
あなたも報告者となって、たとえば去年の実践や今年の苦労を、
みんなが考えるための材料として話題提供してみませんか?



様々な立場の方と集い、教育や子どもについて語り合い、ともに学び合しましょう。

プログラム

【受付】12:30～
@教育学部棟正面玄関

【挨拶】13:00～13:10

【講演】13:10～14:40
@教育学部E棟1階大講義室

【ラウンドテーブル】15:00～16:30
@教育学部B棟
*6つの分科会を開催予定
*詳細は2～3面参照

【情報交換会】17:00～19:00
@生協 第2食堂

申し込み（締切7月5日）

・2～3面で申込み方法をご確認の上、下記QRコードあるいはURLから申込フォームにアクセス・入力または新潟大学教職大学院HPから申し込みください。

<https://forms.gle/REfhNisdw2i2uoFS7>



- ・事前申込みがなくても参加可能です。
- ・参加費無料
- ・懇親会参加費は3,000円（当日頂きます）

問い合わせ先

新潟大学大学院教育実践学研究科教育実践開発専攻
〒950-2181 新潟市西区五十嵐二の町8050
E-Mail: kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp
TEL: 025-262-7227(中島)



新潟大学教職大学院

検索



後援：新潟県教育委員会（申請中）
新潟市教育委員会（申請中）



新潟大学教職大学院 にいがた教育フォーラム 2019 in July

令和元年 七月二十七日（土）

新潟大学五十嵐キャンパス教育学部棟

講演

福井大学 理事・副学長
「育つこと、育てること
―教員としての資質・力量の形成を図るために―」

松木 健一



ラウンドテーブル 分科会の内容

※少人数でグループを作り、以下のキーワードを手がかりに、互いの実践や悩みについて聞き合い、語り合います。

分科会	キーワード
1 教育課程編成	①社会に開かれた教育課程、②カリキュラム・マネジメント、③各教科等横断（各種教育等）、④異校種間連携、⑤一貫教育（幼保・小・中・高）、⑥その他
2 授業づくり	①教科の本質（見方・考え方）、②資質・能力、③一人一人の学び、④教材、学習課題、⑤対話、協働、⑥問題解決、⑦指導と評価、⑧その他
3 生徒指導・教育相談	①教育相談、②生徒指導、③いじめ、問題行動、不登校、④関係機関やカウンセラーとの連携、⑤キャリア教育、⑥子どもの発達理解（児童期・幼児期・青年期）、⑦その他
4 学年・学級経営	①人間関係づくり（教師と子ども、子どもと子ども）、②学級・学年活動（話し合い、ルール作り、自治的活動等）、③社会性の育成、④開かれた経営、⑤道徳教育、⑥その他
5 学校経営	①チーム学校（協働性、同僚性等）、②組織マネジメント、③研修・研究の充実、④地域連携・協働、⑤コミュニティ・スクール、⑥社会の変化への対応、⑦働き方改革（多忙化解消）、⑧その他
6 特別支援教育	①共生教育、②ICTの活用、③発達障害（理解と対応・社会性の支援等）、④学習支援（UDL・読み書き等）、⑤連携（保護者・他機関・校内体制・医療等）、⑥就労（作業学習・就労支援・自己理解等）、⑦その他

ラウンドテーブル 話題提供をしてくださる方を募集します！

- 話題提供の方の話をきっかけに、小グループの参加者みなさんと、実践や悩みを聞き合います。ご自分の実践や悩みについて話してみませんか。
- 話題提供をせず、メンバーとしてのみの参加も大歓迎です。
- 話題提供の1人あたりの時間は、5～10分程度です。話題提供者の方のお話しも含めて、ラウンドテーブル全体の時間は90分程度です。
- 話題提供をしてくださる方は、上記分科会から1つ選択し、関連するキーワードを1つ以上選択して、申込フォームに実践や提案したい内容の要約を書いて提出してください。
- 締め切りは令和元年7月5日（金）です。
- A4版1枚程度の資料を10部作成し、当日持参してください。資料は、1部を受付に提出してください。他はラウンドテーブル時に、ご自分のテーブルの参加者に配付してください。



基調講演

テーマ
講師

育つこと、育てること

一教員としての資質・力量の形成を図るために一

福井大学 理事・副学長

松木 健一 氏



<略歴>

福井大学大学院連合教職開発研究科長 兼 教育学部附属学長、
学長補佐を経て、2019年4月より福井大学理事・副学長
日本教職大学院協会の理事

<ご専門>

専門職としての教師はどうあるべきか、教師が学び続けることのできる学校や
コミュニティをいかに築いていくかを、学校現場に関わりながら探究。あわせて、
幼稚園、保育園や学校の先生方とともに不登校児のサポートや、発達障害
児と一緒に学ぶ授業づくりについても研究。

<著書・論文>

- 教職大学院が進化するために：教員の資質・能力の高度化を実現するための教職大学院の構え、Synapse、(60)、20-26、2018。
- 地域の学校と大学の連携が教師の職能発達を支える、教師教育研究、6、373-376、2013。
- 『すぐに役立つ特別支援教育コーディネーター入門』2006

ラウンドテーブル

興味・関心に応じて集まり、少人数でテーブルを囲みます。メンバー（話題提供者、参加者、ファシリテーター）は、話題提供者の方の話をきっかけに、教育に関わる実践や悩みを聴き合い語り合います。

話題提供者

ファシリテーター



参加者

○中堅、初任者、学生という、いろいろな立場、年齢の方と話できてよかった。また、自分の普段の取組をふりかえったり、悩んでいることについて他の方の話をきかせてもらったりできたこともよかった。
○子どもとの関係づくりについて、改めて大切なことを考えることができた。
○地区・校種を越えた充実した話し合いができた。4~5人のラウンドテーブル方式は大変よい。無理にまとめない（模造紙に書くこと）のでたっぶり話げできた。
(アンケートより)



互いの実践に学び、自分の実践に生かそうとする活動です。教育関係者はもちろん、教育に興味がある方であれば、どなたでも参加できます。さまざまな立場の方々と知り合うチャンスです。



参加者の声 ~これまでのアンケートから~



とてもアットホームな雰囲気です。話することができ、よかったです。日頃の悩みなどを話す中で、9月からがんばりたいこと、やってみようと思えることが見えてきました。



私は学生なのですが、様々な特別支援学校の状況を知ることができ、大変勉強になりました。

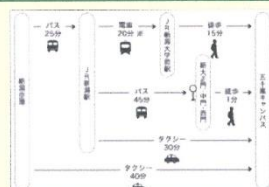
共通のテーマがある様々な方と話をすることができて、自分の考え・価値観を深めることができました。少人数でとても話し合いがしやすいかったです。



学生として、現職の先生方から多くのことを聞くことができました。具体的な学級経営の考え方を学ぶことができて、来年度からがんばろうと思えました。



会場のご案内



*駐車場に限りがありますので、できるだけ公共交通機関をご利用ください。

にいがた教育フォーラム2019 in July 申し込み

- ◆新潟大学教職大学院 にいがた教育フォーラムは、どなたでも参加できます。
- ◆右QRコードから申込フォームにアクセスし、必要事項を入力してください。
- ◆ご記入いただきました個人情報は、本申込以外には、使用いたしません。
- ◆申込締め切りは、令和元年7月5日（金）です。
- ◆ただし、話題提供者としての参加でなければ、当日参加を受け付けます。

右QRコードから申込フォームにアクセス・入力
または新潟大学教職大学院HPからお申し込みください。

新潟大学教職大学院

検索



<https://forms.gle/REhNisdw2i2uoFS7>

Schedule

7/29 Mon - 8/31 Wed 夏期集中サイクル2a
8/8 Thu - 8/10 Sat 夏期集中サイクル3a
10/12 Sat 10月合同カンファレンス（A日程）

8/1 Thu - 8/3 Sat 夏期集中サイクル2b
8/19 Mon - 8/21 Wed 夏期集中サイクル3b
10/19 Sat 10月合同カンファレンス（B日程）

【編集後記】

今年度も、いよいよ夏の集中講義がスタートしました。忙しい教育現場から、短期間でも距離を置いて、日々の取り組みを、そして自分のこれまでの実践を、振り返り、見つめ直していきたいですね。大きくジャンプするには、その前にしっかり身を屈め、力を蓄えることが大切、とも言われます。目の前の問題解決に焦る気持ちを少し抑え、遠くを眺めてみませんか。またちがった景色が見えてくるかもしれません。（N）

教職大学院 Newsletter No.125

2019.7.22 内報版発行
2019.8.19 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp